
福原 忠 (ふくはら ただし)



【書名】 坑夫

【著者】 夏目漱石

【発行】 新潮社 (新潮文庫)

筒井康隆が好きなので、何か1冊推薦しようと思ったのですが、いろいろ思い悩んでどうしても決められなかったので、結局、筒井が絶賛している夏目漱石の中編を推薦することにしました。さる理由で世を儚んだ若者が、偶然茶店で出会った「ぼん引き」のおじさんに「私が紹介すれば坑夫になれる」と言われ、何で坑夫がそんなに有難いのかよくわからないけど世を捨てるにはちょうどいい、と考えて鉾山に働きに行く、というだけのお話ですが、漱石自身が作品中で「これは小説になっていない」と論評しており、筒井が好きなのはそのあたりだと思います。短いのですが読めます。ぜひ読んで下さい。

【書名】 麻雀放浪記〈1〉青春編〈4〉番外編

【著者】 阿佐田哲也

【発行】 角川書店 (角川文庫)、文藝春秋 (文春文庫)

私は麻雀がそれほど上手ではありませんが、赤本第1版でこの本をリストアップしたため、光栄にも本学の競技麻雀部の顧問になることができました。これもご縁かと思えます。麻雀好きな人は読んで下さい。このシリーズは全4巻でそれぞれ独立したお話です。私は〈4〉が一番好きですが、主要な登場人物である坊や哲とドサ健のしがらみを把握するためにも、〈1〉を読んでおいた方が断然〈4〉も面白くなります。ちなみに、1984年に公開の真田広之主演の映画「麻雀放浪記」は、〈1〉の内容です。これも楽しい映画です。ぜひ〈1〉を読んでから見てください。

さて、〈4〉で登場する李億春は、イカサマ麻雀に人生のすべてを投入し、文字通り体をすり減らしながら麻雀に明け暮れるという生活をしています。つまり、ただの薄汚れたアウトローのおっさんなのですが、その麻雀（特にイカサマ技）に対する一途さが不思議な魅力を醸し出します。物語中、手ごわいプロ雀士3人に対し、李がたったひとりて勝負を挑むくだりがあります。李の面目躍如ともいえ、楽しく読めるところです。

また、これまたこてこてのアウトローの魅力的な人物である「ドサ健」のファンになった人は、『ドサ健ばくち地獄 上・下』（角川文庫）をぜひ読みましょう。

【書名】 うらおもて人生録

【著者】 色川武大

【発行】 角川書店（角川文庫）

色川武大（阿佐田哲也の本名）は、ばくちは人生の縮図と考えていることがその作品中の随所で窺われます。前述『ドサ健ばくち地獄』のクライマックス、ドサ健・チン・利之助の3人のプロ賭博師の最終決戦において、利之助がどんなに負けても自分の麻雀の打法を変えずに負け続ける、というシーンがあります。このくだりは「フォームが大切」という色川の信念があざやかに描写されていて印象的です。

本書は、色川武大がその波乱に満ちた前半生から抽出した、人生をしのいでゆくためのセオリー（「フォームが大切」もその一つ）を、これから世の中のでてゆくとする若い人に向けて語った本です。

【書名】 名人伝

【著者】 中島敦

【発行】 角川書店（角川文庫）

実は、私は弓道部の顧問もしています。弓道部顧問としてはこの話を推薦せざるをえないでしょう。弓をとことん極めた名人のお話を書いた短編小説です。（弓道部の皆さんで読んだことない人はちゃんと読みましょうね。）弓に限らず、物事を極めるとはこういうことかと、ただただ呆然とします。

【書名】 大学

【著者】 宇野哲人（翻訳）

【発行】 講談社（講談社学術文庫）

大学は、儒教の教えについて千数百年前に中国で書かれたご本で、次頁の写真の方（二宮尊徳）が手に持って歩きながら読んでいるご本が大学です。いまなら「歩きスマホ」、じゃなくて、「歩き大学」は危険だからやめてください、などと注意されそうですが、昔はおおらかだったのです。

儒教なんて難しくてわからないのでは、などと心配は無用です。意味など

わからなくてよいのです。とにかく手に取って、できれば声に出して読んでください。(そういう読み方を「素読」といいます。)

幸い大学はとても短いのですぐ完読できます。若いうちに「大学を読む」という体験をしておくことは、貴方の人生において貴重な財産となることは間違いありません。

